HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	編集を終えて
Author(s)	渡邊, 誠
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 132, 167-168
Issue Date	2018-08-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72005
Type	other
File Information	110-1882-1669-132.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

編集を終えて

北海道大学大学院教育学研究院 准教授　渡　邊　　誠

この北海道大学大学院教育学研究院紀要の間宮正幸教授退職記念号は，教育臨床心理学ゼミを担ってこられた間宮名誉教授の意向により，通常の退職記念号とは異なって，北海道大学教育学部・大学院教育学院における教育臨床心理学研究グループの仕事を形として残したいとの意図のもとに編集された。北大教育学研究院では研究グループ制はしばらく前に廃され，現在は，ほぼ教員個人単位での研究とゼミ運営がなされている。教育臨床心理学ゼミも間宮名誉教授の退職により，私が一人で担当している。間宮名誉教授の退職に際しては，教育臨床心理学ゼミという名称を継続するかどうかについても確認があり，変更もあり得る状況であった。本号における間宮名誉教授の論考にもある通り，私が臨床心理士養成課程担当教員として採用されたこともあるが，研究の単位が個人となった状況の中，研究内容については個々の教員が決めていくという傾向が強まっていることの表れのように思う。しかし，その際は名称変更は行わず，教育臨床心理学ゼミとして現在に至っている。

本号に掲載された論文は教育臨床心理学研究グループ関係者による寄稿であり，教育臨床心理学研究グループの研究の内容と広がりを示すものである。教育臨床心理学ゼミは間宮名誉教授の退職をもって一区切りという状況であり，本号の内容がその総括となろう。

今後の教育臨床心理学ゼミについて，現状での展望を，以下，私見の形で述べておきたい。

心的外傷支援に関するものが私の実践と研究において一定の比重を占めるため，本号掲載の菊池論文，小泉論文の系譜に連なる内容が，教育臨床心理学ゼミの名のもとに行われてゆくものと思う。大学院生の研究テーマとして，ドメスティック・バイオレンス，深刻な嗜癖，スクールカーストといった，心的外傷関連のテーマが取り上げられるようになっている。大学院において心的外傷関連の研究テーマを扱うということに関しては，ここのところ北大の内外から一定の希望が寄せられており，社会的な関心の高まりが背景にあるであろうことから，今後も続いてゆくのではないかと期待している。

また，間宮名誉教授の論考からは，教育臨床心理学ゼミが幅の広いテーマを扱ってきたことが読み取れるように思うが，その点は，私が一人で担当するようになった現在の学部，大学院両方のゼミにおいても継承してゆきたいと考えている。私が北大教育学部に在籍したのは，特殊教育・臨床心理学ゼミと呼ばれていた1980年代前半から半ばにかけてであるが，教えを受けた狩野陽教授の学識の幅と深さに私は非常に瞠目していて，ゼミに出席するのみならず，「臨床心理学」の講義を四年間に渡って聴講し続けた。そういったことの影響は，私の臨床実践志向の強さと相まって，今もどこかで続いているように思う。臨床心理学を学びたいという要望を持つ学生の数は多く，その関心領域も一定の幅を持つように思う。現在の北大教育学部では，伝統である発達上の問題を中心に扱うゼミが複数あり，松田康子教授が障害者臨床心理学ゼミを担当されている中で，私がそれ以外の臨床心理学領域をある程度幅広く扱うゼミを持つことに

は，学生の要望にこたえようとする点で，一定の意味があると考えている。学生の要望にこたえようとする意図と，高等教育における学生相談が私の研究と実践における専門の一つであることとによって，間宮名誉教授の担っておられた「子ども・若者の研究」の領域の一部が，教育という形の中では継承されてゆくようにも感じている。今後，これまでの教育臨床心理学ゼミ的なものが北大教育学部において継承されてゆく可能性を，私はこのように考えている。

最後になりましたが，今回の間宮正幸教授退職記念号の趣旨を理解くださり，論文をご寄稿くださった皆様に，編集担当としてお礼を申し述べる次第です。